

2003年6月30日

人間科学研究科委員長 殿

## 小堀 哲郎氏 博士学位申請論文審査報告書

小堀 哲郎氏の学位申請論文について下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2003年6月9日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

### 記

1. 申請者氏名 小堀 哲郎
2. 論文題名 近代日本における民衆生活と身体

### 3. 本文

#### (1) 本論文の主旨

現在の私たちの生活や身体のありようの基盤は、近代日本の時代状況の中でそれと密接にかかわりながら形成されてきたことは確かである。私たちの生活様式や身のこなしの多くの部分は、明治期以降の日本の近代化との連続性の中に求めることができる。

近年、日本の近代や近代化のとらえ直しの作業が進んでいる。それは身体をめぐる近代化の議論の中でも同様である。軍隊や学校教育における身体の規律化、訓練化は、国家の思惑の結晶するところであり、当時の先端の学問や思想を背景にして実践されてきたといえる。それを通じて、徹底的な身体管理を行い、伝統的な身体所作が失われ、近代的な身体が獲得される。その「近代の身体化」を通じて、民衆の思考の様式も管理統制されていくことになった。その結果、地域共同体の習俗や独自性が排除され、国家による社会の一元的な管理が進んだ。人々の身体は近代の流れの中に位置づけられていくが、その過程はさまざまであった。

その中から、本論文は、民衆の生活に視点を据えて以下に示す5つの断面をとりあげることで、身体の近代化に関する多様なありようとその特質を解明することを目的とするものである。

本論文では、まず第1に、明治から昭和にかけて台頭してくる坐や呼吸法を特色とする岡田式静坐法をとりあげる。ここでは、心身の健康という観念が民

衆生活の中に浸透する過程を検証する。

第2に、健康法と学校体育とを、各々が理想とする体型の比較を通じて、民衆の身体が葛藤をはらみつつも国家の身体へと包摂されていく過程を分析する。

第3に、昭和戦前期の健康雑誌『健康時代』をとりあげ、記事内容の変遷をあとづけることにより、その読者たちが健康に関する言説をどのように受容し、身体化していったのかを探る。

第4に、昭和9年に設立された恩賜財団愛育会を事例にして、母子の身体へ向けての事業と、民衆がそれをどのように受け入れていったのかを考察する。

最後に、現代社会の状況に立ちもどって高齢社会における健康とは何かについての考察を行う。それは、健康を身体的なものだけでなく精神的・社会的な側面も含めた多面的なものとして捉えなおす必要があると考えたからである。

## (2) 各章の要約

第1章「坐と肚の思想 岡田虎二郎と岡田式静坐法」では、明治40年代から昭和初期にかけて台頭してくる坐や呼吸法を特色とする修養的健康法の中で、最も支持者を集めたものの1つである岡田式静坐法をとりあげて、創始者岡田虎二郎の生涯とその思想を考察した。また、愛好者たちの姿を通じて、身体の近代化が推し進められていた当時に、なぜ近代的な身体とは相容れない坐や肚が注目されたのかを探り出すことをめざした。それは、西洋近代の超克が望まれた当時の時代状況では、人間の根本に立ち返り生の充実を感じとれる岡田式静坐法のような身体技法が有効な手段の1つであったためである。

第2章「民衆の身体と国家の身体 その葛藤と統合をめぐる」では、明治末から昭和戦前期にかけて流行する健康法と学校体育とを、各々が理想とする体型の比較を通じて、民衆の身体が葛藤をはらみつつも国家の身体へと包摂されていく過程を分析した。その際の1つの鍵になるのは、思考様式の変化である。思考様式の変化は身体をみる視座の変化を促し、また身体へのまなざしの変化が思考を変えていく。さらにここでは、学校教育の普及を踏まえ、1930年代前後に身体イメージの基本潮流が変化した点についても考察した。

第3章「健康雑誌とその読者 医学博士の権威と責任自己回帰システム」では、明治末から昭和戦前期にかけての出版文化の発展を踏まえ、健康雑誌の読者たちが科学的知見に基づいた健康に関する言説をどのように受容し、身体化していったのかを探ることを目的とした。主な読者層は都市の新中間層であり、彼らが健康に関する言説に呪縛されながらも、その一方でそれを積極的に求めていった様子を描き出した。その理由として、従来のもとは異なる家族・職業・生活形態を営む彼らが、自分たちのライフスタイルに即した生活規範を求めていたことを挙げ、そのために医学博士の言説を束縛されつつも積極的に取り入れようとしていたことを指摘した。彼ら自身もまた、規範の強化に大き

く加担していったのだといえる。

第4章「母子の身体をめぐる事業とその受容 恩賜財団愛育会を事例に」では、児童の養護と母性の強化を目的として設立された恩賜財団愛育会を事例にして、母子の身体へ向けての事業と、民衆がそれをどのように受け入れていったかを考察した。愛育会の実践のうち、主に都市を中心に展開された「こども愛育展覧会」と、村落を主たる対象とした「愛育村活動」をとりあげた。都市部では新中間層をうまく取り込んでいたし、村落部では、畳み掛けの論理が功を奏した。

第5章「生の肯定 高齢社会の健康」では、上記4つの章で検討してきた身体の近代化という主題は、これまで扱ってきた時代区分の中だけで解消されるものではないことを踏まえ、科学的な言説によって今日の高齢化社会状況の中にあって健康のありようの一元化が強化されている現状から脱却するために、健康を相対化する視点が必要であることを述べた。

### (3) 本論文の評価

近年、高齢者問題が顕在化するにつれて、日本人の健康への関心は異常に高まっている。健康ブームである。健康は、身体と表裏の関係にあり、今日、人々の生活における一大関心事項となっている。本論文の筆者は、はやい時期から、日本人の健康意識や身体観が、近代日本の時代状況とともに形成されてきたと考え、この問題意識にたって明治から昭和初期にかけて健康や身体についての新しい観念が民衆生活の中に浸透していった過程の研究に取り組んできた。

本研究において、今日の健康ブームを相対化してより広いパースペクティブの中で捉え直そうとする筆者の態度と、民衆の近代的な身体観の獲得すなわち「近代の身体化」というここでの仮説は、発想がユニークで妥当性の高いものとして評価することができる。

筆者は、近代日本における民衆の身体観形成の源を、明治・大正時代に流行した健康法の中に求めることができるとして、当時、広く好評を得た岡田式静坐法、川合式強健術などをとりあげている。富国強兵をめざす当時の日本において健康な身体は必須の要請であり、この国家的身体観と伝統的な民衆のそれとのせめぎあいの中から、新しい科学的な健康知識にもとづいた身体観が生まれてきた過程を筆者は明らかにする。その後、昭和初期に普及した健康雑誌や学校教育がその身体観の形成をさらに補強する役割を担ったことについても、筆者の分析は及んでいる。

このように、筆者は近代日本における健康法の隆盛の中で、健康と身体に関する見方が形づくられた経緯を丹念に検証している。この点が本論文の特長で、そこに独自の視点が存在するといえる。

もちろん、戦前期に形成された身体観は戦争とその後の混乱によって打撃を

受けることになるが、本論文の第4章でとりあげられている愛育会のように、戦後もその活動が持続した事例もある。いずれにしても、戦後どのようにして近代日本の身体観が再構築されるに至るか、この点については本論文の考察は及んでおらず、今後に残された課題となっている。

以上のような評価にもとづき、本審査委員会は小堀哲郎氏の学位申請論文は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分に値するとの結論に至った。

以上

小堀 哲郎氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査委員 早稲田大学教授 博士（人間科学）早稲田大学 嵯峨座晴夫

審査委員 早稲田大学教授 博士（人間科学）早稲田大学 蔵持不三也

審査委員 早稲田大学教授 博士（人間科学）早稲田大学 店田 廣文